

# 新発見の新島英文資料

北垣 宗治

このたび『新島襄全集』に収録されていなかった新島の英文資料が14点見つかった。発見の経緯と、14点の内容と、それらの意義について紹介したい。

## 1. 発見の経緯

周知のように、ケーリ家は三代に亘るアメリカン・ボード宣教師の家系である。日本における初代であるオーテス (Otis Cary, Jr. 1851-1932) はアーモスト大学を新島に遅れること二年、1872年に卒業し、アンドーヴァー神学校をも二年遅れて1876年に卒業し、アメリカン・ボード宣教師として来日した。岡山での宣教の時期 (1879-88) をへて、同志社神学校教授となり、説教と実践社会学を1892年から1918年に亘って教えた。彼は歴史家であり、主著 *History of Christianity in Japan: Roman Catholic, Greek Orthodox, and Protestant Missions* (New York: Fleming H. Revell, 1919. 後に合本の復刻版が1976年にCharles E. Tuttle社から出た) は名著の誉れが高く、今なおその価値を失っていない。

二代目のフランク (Frank Cary, 1888-1973) は上記オーテスの三男で、アーモスト大学を1911年に卒業し、オベリン神学校で神学を修めた。アメリカン・ボード宣教師として来日、小樽を中心に北海道で宣教に従事した。日米関係が険悪になってもなお日本に留まろうとしたが、日本のクリスチャンからぜひ退去してほしいと要請されると、帰国せずにフィリピンのダバオに渡り、その地の日本人に宣教していた。太平洋戦争が始まると

日本軍の捕虜となって辛酸をなめた。戦後、健康を回復するとすぐに宣教師として来日し、関西を拠点とし、尼崎教会を助けるのみならず、宣教師の長老として若い宣教師たちを指導した。同志社の理事をも務めた彼はアメリカン・ボード日本ミッションの歴史に詳しく、意欲的に資料を集めてきた。その一部がいわゆる American Board Japan Mission Papers であり、それがケーリ家から、このたび同志社大学人文科学研究所に一括して寄贈される予定である。

三代目のオーテス (Otis Cary, 1921-2006) はフランクの息子として小樽で生れた。彼がアーモスト大学の三年次のとき太平洋戦争が起こり、日本とアメリカという「二つの祖国」の間で悩んだ結果、アメリカ海軍の情報士官となることを決意して、海軍日本語学校に入った。アリューシャンやサイパンに派遣されたのち、ハワイにおいて日本人捕虜と接触したことが彼の人格形成に貢献した。アーモスト大学1943年卒業組であり、戦後イェール大学大学院で歴史を専攻していたとき、アーモスト大学から同志社に「代表」として派遣されることがきまり、1947年から1992年まで、45年にわたってアーモスト大学代表としての任務を果たした。アーモスト館長として多くの人材を育て、同志社大学教授としてはアメリカ文化史を教えたほか、新島襄全集編集委員として、その第6巻 (英文書簡集) と第7巻 (英文資料集) を担当した。彼は父フランクから受け継いだこの Japan Mission Papers に手をつけることなくこの世を去った。

この資料に最初に着目して、それと取組んだのは同志社大学法学部の卒業生で、現在山形大学で教えている伊藤豊教授である。伊藤氏は同志社大学人文科学研究所の第15期、16期、17期の「アーモスト大学と同志社大学の交流史」研究会のメンバーであった。山形からの参加回数はきわめて限られていたが、その代わり、氏は膨大な資料を山形大学に持ち帰り、多大の時間とエネルギーとを注ぎ込んで、資料を一点一点検してファイルにおさめ、目録を作り、それを20個の箱に納めて返却してきた。もとの資料

のままではとうてい第三者が利用することのできない未整理の状態だった。それを初めて利用できるようにした伊藤氏の功績を私は高く評価するものである。

なお伊藤氏はこのJapan Mission Papers との関連で、『山形大学紀要（人文科学）』第17巻1号（2010年2月）に「『アメリカン・ボード日本ミッション関連資料』（仮題）の概要について」という論考を發表している。今後これを利用する人にとって、これは好個の手引きとなるエッセイである。殊に、これまで誰も調べたことのなかったDeWitt C. Jencksに光を当てていることを特筆しておきたい。ジェンクスはコネティカット州出身のアメリカ人で、1877年から1887年まで神戸に駐在して、アメリカン・ボード日本ミッションの世話をした。彼は神学校を出ていないので、普通の宣教活動には従事しなかったようである。いってみれば、労働組合に専従者が存在するごとく、ジェンクスは日本ミッションの事務と会計を引受けて、10年間に亘り、忠実に働いてきたエイジェントである。

アメリカン・ボード日本ミッションは1869年にD. C. Greeneが派遣された年から活動を開始した。横浜、東京はそれより十年前からオランダ改革派、長老派、聖公会等のミッションが拠点をおいて活動していたので、後発のアメリカン・ボードとしては東京・横浜を避け、関西に拠点を置かざるをえなかった。アメリカン・ボード系の宣教師たちが関わった学校である神戸ホーム（神戸女学院）や同志社英学校や梅花女学校が関西に根をおろすことになった淵源はここにある。

組織としての日本ミッションは“secretary” という役職を置いた。それはボストンの本部と連絡を取ったり、宣教師たちが書物や品物をアメリカに注文する場合の仲介をしたりするためだった。新島の場合、神戸港発の船に乗る前日には、神戸在住のジェンクスの所に泊めてもらったり、渡米するときには船の切符を入手してもらったりしている。具体的には次の人々がセクレタリの任に当たってきた。

- 初代 O. H. Gulick, 1872-1877  
二代 D. C. Jencks, 1877-1887  
三代 A. W. Stanford, 1887-1895  
四代 D. W. Learned, 1895-1910  
五代 Otis Cary, 1910-1918

その後のセクレタリについては正確なことがわからず、現在調査中であるが、Darley Downs (1894-1969) がどうやら最後のセクレタリだった可能性が強い。しかしダウنزの前にFrank Cary が暫くセクレタリを務めた可能性も否定できない。

今回人文研に寄贈されたのは、主として上記第二代のセクレタリだったジェンクス時代のもので、ジェンクス宛のビジネス・レターが圧倒的に多い。1870年代、1880年代に日本ミッションに所属していたほほすべての宣教師がジェンクス宛に書いている。おもな名前を拾ってみると、D. C. Greene, O. H. Gulick, J. D. Davis, J. C. Berry, M. L. Gordon, Eliza Talcott, Julia Dudley, J. L. Atkinson, H. H. Leavitt, Mary Gouldy, Wallace Taylor, J. K. A. DeForest, A. H. Adams, J. H. Neesima, E. T. Doane, D. W. Learned, Martha Barrows, A. J. Starkweather, Frances Pamelee, W. W. Curtis, Virginia Clarkson, Otis Cary, J. T. Gulick, R. H. Davis, J. H. Pettee, Frances Gardner, Abby Colby, A. Y. Davis, George Allchin, Emily Brown, Frances Hooper, Susan Searle, C. M. Cady, M. R. Gaines, Doremus Scudder, Linda Richards等である。

## 2. 新島の英文資料

その中に新島襄の英文資料が14点あり、それを日付順に紹介していくことが本稿の目的である。この14点は何れもケーリ教授が編纂した新島襄全集第六巻に入っていない。つまりケーリ教授自身、先代から受け継いだ資

料の中に、新島の英文書簡があることを知らなかったのである。今回の発見により、新島の伝記を書き変えなければならないほどの「大発見」はない。二通の例外（①と⑤）を除くと、あとはビジネス・レターということになるであろう。なお明らかなスペリングの間違いは、適宜訂正した。

①Neesima to the American Board missionaries in Kobe and Osaka,

May 7, 1874

Andover, May 7<sup>th</sup> 1874

Dear Brethren in Kobe & Osaka,

Yours of the 1st of last January was at hand on the 26<sup>th</sup> of last February. I was very glad to receive your united New Year greeting across the Pacific Ocean. I esteem it very highly, because it was sent from you & it was also the very 1<sup>st</sup> New Year greeting ever sent me from Japan, since I bid her my last farewell.

I am greatly indebted to you, brethren, for your kindly remembering me on that occasion, and sending me such a hearty greeting, and moreover for your kind invitation extended to me as to join you in your glorious work so wonderfully & so favorably begun in Japan.

I might have given you a reply much sooner, but I thought then I might better wait until I could give you a decided idea of my coming to either Kobe or Osaka.

I hesitated to apply for the appointment of the American Board, because I felt, I was not well qualified to apply for it.

Although my eye was always resting on your field, still I had some idea to join the Dutch brethren in Yokohama, because they have often written me and expressed their wishes to have me there & labor with them. I understood, it was against the policy of the American Board to

send a native to his own country as a missionary, and support him. So I have almost made up mind to join the Dutch Brethren, if I had not received your united letter last February. It suggested me to wait still longer for the application to the Dutch Board. While I was spending last vacation with Mr. & Mrs. Hardy at Boston Dr. Clark sent me a word to call on him at the Missionary House.

Accordingly I called on him. He showed me a letter from one of you and told me that the Board is very anxious to get hold of me & send me to either Kobe or Osaka as an assistant missionary. Still I felt somewhat uncertain of their appointment, because I am not yet licenced to preach (I lost the opportunity of completing Prof. Park's course in my 2<sup>nd</sup> year in the Seminary by going to Europe & staying there about 15 months) and I wrote Dr. Clark three weeks ago & suggested him to postpone their appointment until next July, because I shall be then licensed, and the Board shall know certainly whether my Theological views are truly orthodox or not.

Dr. Treat wrote me another week and informed that they have received several testimonials of my character & qualifications for the work from Professors of Amherst College and also of our Seminary, and I need not fear of my disqualification; and the Committee proceeded at once to appoint me as a corresponding member of the Japan Mission.

So I did send my written offer to the Board last week and expect to hear from them very soon. Dear Brethren! It does seem [to] me that the Providence, which has brought me into this country to receive Christian education, is also designing to take me back again into my native land. If the Lord will I shall be permitted to be numbered as a least one among you within this year.

I am anticipating with great delight to join you in your work, and hoping that the Lord will spare my life for *his* work.

I thank you, brethren, for your united prayers offered for me & trust, you will still continue it for me. Pray for me that I may ever grow in his grace and hence be better qualified for his glorious work.

I read your letters in the Missionary Herald from time to time with great interest and am delighted to know that your work is so marvelously blessed. It is indeed the Lord's doing. Although I find much to do here in the Seminary, still I go out occasionally to our neighboring churches to speak for the Japan Mission. They have promised me to pray for us more than ever before.

Brethren! I beg your pardon for my long delay to give you a reply. I have already given you reason why I have not written you sooner. I wish, I could find more time to write to you. But I am so much pressed by the Seminary duty now, & find it almost impossible to do any thing else. While I am here in the Seminary I shall never be able to write you much. Still my heart, sympathy & prayers are always with you. May the Lord soon fulfill his promise to Christ in Japan & the islands of Sea through your arduous effort!

Yours in Christ

Joseph Neesima

[訳]

神戸と大阪の兄弟たちへ。

1月1日付のお手紙は2月26日に拝受。太平洋を越えて新年のご挨拶を頂き、大喜び致しました。特にそれが嬉しかった理由は、それが外ならぬ皆様からの手紙であり、日本を去って以来私が日本から受取った初めての年賀状だったからです。

兄弟たち、ご親切に私を思い出して頂き、しかも日本において幸先よく開始されたすばらしい事業に参加するようとの暖かいお招きを頂き、心から御礼申し上げます。

すぐにご返事申し上げるべきでしたが、私が神戸もしくは大阪に行く決意をお伝え出来る日がくるまで、待つ方がよいと考えたのでした。

私がアメリカン・ボードに志願することを躊躇したのは、私にはその資格がないと感じたからでした。

私は常に皆様の現場に注目しておりましたが、私は横浜のオランダ〔改革派〕の兄弟たちのところに行くことも考えていたのです。彼らから屢々手紙がきて、自分たちと一緒に働いてほしいと要望していたからです。アメリカン・ボードの方針として、宣教師志願者を彼の生れた国に派遣することはしないと、私は理解していました。ですから、もしも皆様からの手紙を二月に受取らなかったとしたら、オランダ〔改革派〕の兄弟たちのところに行く決心をしかけていました。お手紙は、オランダ〔改革派〕への志願を先延ばしする方がよいという気にさせました。この前の休暇をポストンのハーディー夫妻のところまで過していました時、クラーク博士からミッションナリ・ハウスへの呼び出しが参りました。

そこで私は博士を訪問しました。博士は皆様のうちのお一人が書かれた手紙を私に見せてから、ボードとしては私を確保して、宣教師補として神戸か大阪に派遣することを強く望んでいる、と言われました。それでもなお私は宣教師として指名されることに幾分か不安を覚えました。というのは、私はまだ説教する資格を取得していない（私は神学校の二年次のときヨーロッパに行ったため15カ月休んでしまい、パーク教授の科目を完了する機会をなくしたのでした）からです。そこで私は三週間前にクラーク博士に手紙を書き、七月まで指名を待つてほしいと伝えました。七月になれば説教資格も取れますし、ボードとしても、私の神学上の見解が真に正統派的であるかどうかははっきりするからです。



するとトリート博士から手紙がきて、アーモスト大学とアンドーヴァー神学校の教授たちから私の性格と資格について数通の宣誓証言が届いているので、資格に関する問題はないと知らせて下さいました。ただちに「最高審議」委員会は私を日本ミッションの準宣教師として任命する手続きに入りました。

そういうわけで私は先週ボードに対し、志願書を書いて送り、返事を待っているところです。兄弟たちよ、キリスト教教育を受けるためにこの国へと導き給うた摂理は、私を祖国に帰すことを目論んでおられるようです。主が許し給うならば、私は今年中に皆様の間で最小の弟分として数えられることになるでしょう。

私は大いなる喜びをもって、皆様の仕事の仲間に加わることを期待し、主の御働きのために主が私の生命を守って下さることを希望しています。

兄弟たち、あなたたちが私のために捧げて下さったお祈りを感謝します。また、これから先もなお、私のために引き続きお祈り下さると信じています。どうか主の恵みの中に私が成長しますように、そして主の輝かしいお仕事に一層ふさわしい者となれるようにと祈って下さい。

私は『ミッショナリ・ヘラルド』に時折掲載される皆様の手紙を非常に関心をもって読み、皆様の仕事ですばらしく祝福されていることを嬉しく思っています。まさしくこれは主のお働きです。神学校ではまだしなければならぬことが沢山ありますが、時折付近の教会に出掛けては、日本ミッションのことを話しています。彼らは今迄以上に私たちのために祈ると約束してくれました。

兄弟たち、ご返事がこんなに遅れたことをお詫び致します。何故これほど返事が遅れたのか、その理由はすでにご説明致しました。皆さまにもっとお便りを書ける時間がほしいものです。しかし今は神学校の課業に圧迫されて、外の何もできない有様です。神学校にいる限り、皆様に多くの手紙を書くことはできません。それでも私の心と願いと祈りは常に皆様に

向っています。どうか主が、日本と近海の島々において、皆様の大きいなる働きを通して、キリストに対する約束を遠からず果して下さいように！

キリストにあって

ジョゼフ・ニーシマ

[解説]

今回発見された新島資料の中で、この手紙は最も重要である。この手紙は1874年1月1日付で神戸・大阪に在住するアメリカン・ボード宣教師たち8人（Greene, Berry, Atkinson, Davis, Dexter, Leavitt, Gordon, Taylor）が連名で新島宛に送った手紙（新島遺品庫目録番号2326）に対する返事である。この手紙が重要である理由は、第一に、1874年という、新島にとって決定的となった年に書かれたものだからである。この手紙から分ることの一つは、1874年当時、日本で二つの宣教師グループが新島に目をつけ、彼を獲得しようとしていた。一つは横浜のアメリカ・オランダ改革派教会の宣教師 J. H. Ballagh を中心とするグループで、バラの新島に対する訴えの手紙、特に1872年1月23日付、1873年6月21日付の手紙は、読む者の胸にひびく。新島はバラを通して父民治宛の手紙を送ったことがあった。のみならず、同じオランダ改革派の S. R. Brown 宣教師は、1869年6月に、アーモスト大学に新島を訪ねたことがあり、その機会に新島は父宛の手紙を託している。ブラウンはその年の後半に日本に行くことを計画していた。またブラウンの弟子である Mary E. Kidder 宣教師の父は当時南アーモストに住んでいたため、ミス・キダーは日本をめざして出発する直前に父の家に新島をお茶に招待し、日本について質問している。キダー女史はむろん、フェリス女学院の創立者となった人である。ブラウン夫妻とキダー女史は横浜から新潟に赴任する際、安中を通り、本陣で新島の祖父や弟や父に会って、新島の消息を伝えている。ブラウンとしては将来新島の力を借り

たいという気持があったことは当然のことである。（但し新島の方はブラウンに協力することを躊躇した形跡がある。弟の双六をブラウンの許で勉強させたい気持があったこともまた事実であるけれども。）

新島の助力を期待していたもう一つのグループは、アメリカン・ボードが日本に派遣した宣教師たちだった。彼らは希望と意欲に満ちて来日し、宣教活動を始めたが、日本語の難しさに辟易していた。新島としては、気持の上からすると、このグループに加わりたかった。しかし新島には二つの問題点があった。一つは彼がまだ牧師の資格を取っていないことだった。新島は1872年春以降、岩倉使節団の田中不二麿文部理事官の通訳・案内役として、15カ月間アンドーヴァー神学校を休学していたので、Edwards Amasa Park教授の科目を終了していなかった。しかし牧師の資格は急がなければその年の夏までには取る事が可能だった。もう一つの問題は、アメリカン・ボードには外国人を彼の出身国に派遣した前例がないことだった。これは新島の問題であるより以前に、アメリカン・ボード自体の問題だった。

1874年の新島の帰国前に、日本ミッションとボード本部との間で取り交わされた一連のやりとりについては、本井康博氏が『京都のキリスト教：同志社教会の19世紀』（日本キリスト教団同志社教会、1998）pp. 24-33で詳細な研究を発表している。本井氏の研究では「横浜海岸公会の牧師人事」が一つの視点であるが、新発見のこの書簡では、新島の意識は横浜海岸公会というよりは”Dutch brethren”（オランダ改革派の兄弟たち）であったことがわかる。「横浜海岸公会」も”Dutch brethren”も、究極的には同じものを意味するのであろうが、新島としてはどうも教会よりはミッション中心の考え方にこだわっていた、というのが真実であろう。新島のこの手紙は、心配と疑念が晴れて、喜びに満ちて書いた決意の表明なのである。

アメリカン・ボードのSelah B. TreatはCorresponding Secretaryとして

はN. G. Clarkの先輩に当り、1847年から1877年までその任に当たっていた。ボードのCorresponding Secretary は二人制で、当時はトリートとクラークだった。

②Neesima to Jencks, September 13, 1877

Mr. Jencks,

My Dear Sir

Your letter came to my hand toward the midnight. I thank you for your all kind favor as well as your trouble for my sake. As it was too late I could [not] write you last night.

I have signed the three drafts. I will send them as soon as possible this morning. But if you fail in sending it beg by Mr. Learned please do send by Dr. Taylor or some body else. I am not in a great hurry for getting the money. Thank you for your kind regards to my wife. She wishes to send hers back to you & Mrs. Jencks.

Yours Truly

J. H. Neesima

[訳]

深夜にお手紙拝受、ご親切に対して御礼申し上げるとともに、お手数をかけてすみません。遅すぎたので、昨夜のうちにご返事を書くことができませんでした。

三通の小切手に署名しました。できるだけ早く、今朝のうちに送るつもりです。ラーネッド氏を通しての送金が不可能でしたら、テイラー博士か誰かに頼んでみて下さい。私は入金を急いでいるわけではありません。妻へのご挨拶有難うございます。妻からジェンクスご夫妻によろしくと申しています。

[解説]

典型的なビジネス・レターである。当時の送金のややこしさの一端がわかる。アメリカからの小切手はジェンクスに送られてくると、ジェンクスはそれを新島に送ってサインを求める。新島がそれにサインしてジェンクスに返すと、ジェンクスは日本円に換えて京都ステーションの書記であるラーネッドに送る。新島は必要に応じてラーネッドに金を請求する。以上のような手続きが介在していたと想像される。

Dwight Whitney Learned (1848-1943) はアメリカン・ボード宣教師として1876年から同志社英学校を教えてきた。聖書、ギリシア語、経済学から体操まで、あらゆる科目を教えてきた。京都ステーションのセクレタリを務めたほか、同志社英学校でも1879年から1891年まで教員会議で書記の役割をはたした。

Dr. Wallace Taylor (1835-84) はアメリカン・ボードの医療宣教師。同志社時代、京都府との約束に反して医療行為をしたため、京都府からとがめられ、京都を去って大阪に移った。新島はテイラー宣教師を信頼していた。

③Neesima to Jencks, September 14, 1877

Mr. Jencks

My Dear Sir:

I received all the money which you did send me by Mr. Learned. I am very much indebted to you for the kind service done for me. As it cost me 13 cents for sending that drafts back to you yesterday, I presume that you have expended the same for sending it to me. So allow me to send you 13 cents worth of postage in order to pay you for what you have spent for me.

Our school will be commenced pretty soon. I am getting to be pretty

busy now.

Yours Truly

J. H. Neesima

I sent you three Drafts by a special mail yesterday morning. I suppose you did receive them by the yesterday noon.

[訳]

お送り頂いたお金はラーネッド氏を通して受取りました。御親切に有難うございます。昨日、小切手をお返すのに13セントかかりましたから、私宛お送り頂いた時にも13セントかかったことと思います。その分を郵便切手でお返しすることをお許し下さい。

私たちの学校はもうじき始まります。とても忙しくなりそうです。敬具

J. H. ニーシマ

昨日の朝、三枚の小切手を書留でお送りしました。昨日の昼までには受取られたことと思います。

[解説]

前便の翌日に書かれた手紙。新島の律儀さを示すエピソードである。

④Neesima to Jencks, December 26, 1877 ハガキ

Mr. Jencks

Dear Sir

Thank you for your kind invitation. But I am intending not to come to the meeting at this time. I want to use myself as much as I can & also I am obliged to attend some unavoidable business now. I was called up to the Kiyoto Fu this morning for our Missionary business' sake.

J. H. Neesima

My wife sends her Yoroshiku to you all.

[訳]

招待状を有難うございます。しかし今回は会議に出席できそうにありません。自分自身をできるだけ使いたいのですが、今回はやむを得ない仕事に行かざるを得ません。私たちの宣教事業のため、今朝京都府庁から呼ばれているのです。

J. H. ニーシマ

妻から皆さまによろしく。

[解説]

ハガキ。新島が府庁から呼び出された目的が何であったのか、特定しがたいが、この1877年12月14日に新島は二人の女性宣教師H. F. Parmelee と Julia Wilson の同志社女学校への雇入れ願いを京都府に提出し、その許可がなかなか下りなくて困っていた時期である。またこの頃、山本覚馬に「御用無之当府出差差免候事」という通告があったので、そのことも関係していたかもしれない。

⑤Report of the Dendo-quaishia

To the missionaries of the American Board in Japan

Dear Sirs:

Being requested by you at this Annual Mission meeting to make a report of our Society, I have hastily prepared a brief statement of the work of our Society, which we have recently begun to undertake to Christianize our benighted Empire.

As you know all about our society from very beginning and most of you were present when it was organized at Osaka last January, I deem it

unnecessary to inform you how or for what purpose it was organized. I will simply state here the amount of money, which we have received since the last January until the last May as well as the amount of disbursement, which we have recently made for sending out a few preachers of the Gospel to different parts of the Empire.

The amount received:	e s
From the churches (four in number) in Kobe, Hiyogo & Sanda	37.00
“ “ “ (two in number) in Osaka	12.75
“ “ “ (three in number) in Kiyoto	13.945
“ a friend in Kiyoto	3.00
“ “ “ in Yoka-ichi	5.00
Total	71.695

The amount disbursed:

The names of persons sent out by us

Mr. Fuwa (a Bib. Class man in the Kiyoto Training School) is sent to Kasaoka with an understanding that the people of the place should give him board. He expects to stay there three months. We gave him 8.00 e for his travelling expences and 3.00 e for his pocket money. 11.00e

Mr. Ichihara (ditto) is sent to Annaka. His travelling, boarding & some other necessary expenses shall be met by the people. He expects to be there 2½ months. For his going there we lent him 9.00. 9.00

Mr. Kanamori (ditto) is sent to Okayama. His travelling & boarding exp. shall be met by the people. He will stay there three months. We lent him 4.00 for his travelling exp. & gave him 3.00 for pocket money. 7.00



Mr. Kozaki (ditto) will go to Hikone next month. He will be there two months. We gave him 2.00 for travelling exp. & 2.00 for pocket money.	4.00
Mr. Ukita (ditto) will go to Mino & stay there one month. We gave him 3.00 for trav. exp. & 1.00 for poc. money.	4.00
Mr. Yamazaki (ditto) is sent to Fukuchi-yama. He will be there three months. We gave him 4.00 for trav. exp., 12.00 for board & 3.00 for poc. money.	19.00
Mr. Akamine (a fourth year man) is sent to Imabari. He will stay there three months. We gave him 4.00 for trav. exp. & 3.00 for poc. money. We understand that the people of that place have raised 10.00 to meet his necessary exp.	7.00
Mr. Hori (a third year man) is sent to Kameoka. He will stay there 2 months. The people will give him board. His travelling exp. was paid by the 2 <sup>nd</sup> Saikiyo church. We gave 2.00 for poc. money.	2.00
Mr. Uyehara (ditto) is sent to Takatsuki. He will stay there three months. The people will give him board. The 2 <sup>nd</sup> Saikiyo gave him his travelling exp. We gave him 3.00 for poc. money.	3.00
	<hr style="width: 50px; margin-left: auto; margin-right: 0;"/> 66.00
Our agents' travelling expenses	3.90
	<hr style="width: 50px; margin-left: auto; margin-right: 0;"/> 69.90
Total	69.90
The amount received	71.695
“ “ disbursed	69.90
Balance	1.795

We are rejoiced to say that we have thus far undertaken through the help of our young churches to send out a few laborers to the above

mentioned places, and we shall be still more rejoiced if we could get more money & more men to occupy a dozen more places which are already waiting for the light & truth.

Your obedient Servant

Joseph H. Neesima

Our Agent of the

Dendo-quaishia.

Arima, June 24<sup>th</sup>, 1878

[訳]

#### 伝道会社報告

アメリカン・ボード日本ミッション宣教師各位

ミッションの年次総会において伝道会社の報告を求められていますので、会社の事業について取り急ぎ簡単な報告書を作成しました。当伝道会社は、未開の帝国をキリスト教化するため、最近設立したものであります。

当伝道会社については皆さまは創立の時期からご存知であり、皆さまの大多数は今年の1月に大阪での設立総会にご出席頂きましたから、いかにして、どのような目的のために組織されたかについて私がお説明申し上げる必要はなかろうと存じます。ここに報告いたしますのは、本年1月以来5月までに受取った金額と、国内各地に福音宣教のために派遣した人たちに要した支出の額であります。

受取った金額 [収入] の部

神戸、兵庫、三田の4教会 [神戸、兵庫、多聞、三田] から	37円
大阪の2教会 [大阪、浪花] から	12円75銭
京都の3教会 [第一、第二、第三]	13円94銭5厘
京都の一友	3円

八日市の一友

5円

計 71円69銭5厘

支出の部

伝道会社が派遣する学生の名前

不破 [唯次郎] 氏 (京都トレイニング・スクールのバイブル・クラスの学生) は笠岡に派遣される。笠岡の人たちが彼の食費を負担。3か月滞在の予定。旅費として8円、手当3円。 11円

市原 [盛宏] 氏 (同) は安中に派遣される。旅費、食費、その他の必要経費は地元負担。2か月半滞在の予定。9円を貸与。 9円

金森 [通倫] 氏 (同) は岡山に派遣される。旅費と食費は地元負担。3か月滞在の予定。旅費として4円を貸与し、手当3円を支給。 7円

小崎 [弘道] 氏 (同) は来月彦根に行く。2か月滞在の予定。旅費として2円、手当2円 4円

浮田 [和民] 氏 (同) は美濃へ行き、1か月滞在の予定。旅費として3円、手当1円。 4円

山崎 [為徳] 氏 (同) は福知山に派遣される。3か月滞在の予定。旅費として4円、食費12円、手当3円。 19円

赤嶺 [瀬一郎] 氏 (4年生) は今治に派遣される。3か月滞在の予定。旅費として4円、手当3円。地元では彼の必要経費として10円を集めている。 7円

堀 [貞一] 氏 (3年生) は亀岡に派遣される。2か月滞在の予定。食費は地元が負担する。西京第二公会が旅費を負担。手当2円。 2円

上原 [方立] 氏 (同) は高槻に派遣される。3か月滞在の予定。食費は地元が負担する。西京第二公会が旅費を負担。手当3円。 3円

計 66円

職員旅費

3円90銭

計 69円90銭

収入 71円69銭5厘

支出 69円90銭

差引 1円79銭5厘

幸いにして、上記の土地には、成立後間もない諸教会から少数ながらも働き手が与えられ、その助けを借りて宣教に従事できることを喜ぶものがあります。さらになお金と人とを得ることができれば、真理の光を待ち望んでいるさらに十二箇所の土地に進出できる状態であることを嬉しく思う次第です。

皆さまの従順なしもべ、

ジョゼフ H. ニーシマ

伝道会社委員

有馬、1878年6月24日

[解説]

1878年6月にアメリカン・ボード日本ミッションは有馬で年次総会を開いた。有馬はアメリカン・ボード宣教師たちの集まる場所として喜ばれたようである。日本ミッションの一員でもある新島は、総会で日本基督伝道会社を代表して報告をした。この報告のテキストから、いくつかのことがわかる。

日本基督伝道会社は澤山保羅の発案により、京阪神の九つの教会（大阪、浪花、神戸、兵庫、多聞、三田、京都第一、第二、第三の諸教会）が代表を送り、1878年1月2日と3日に大阪土佐堀の梅花女学校で会議を開いて成立した。初年度の委員には澤山保羅、新島襄、今村謙吉が選ばれている。現代人の耳には「伝道会社」は少し奇異に響く。要するに国内の各地に伝道者を派遣するための機関であり、派遣されたのは同志社英学校最初

期の学生たちであった。

九人の同志社英学校の学生がそれぞれ割当てられた土地に向うのであるが、それぞれの土地により、気風が異なることがわかる。今治のように意気盛んで誇り高い土地では、今治の信徒たちが10円を集めて、派遣学生を待ち望んでいたらしい。それにしても、派遣学生の中に後年の大牧師である海老名弾正や宮川経輝が入っていないのはなぜであろうか。そういえば、横井時雄も入っていない。

派遣される学生の滞在期間にも長短がある。そのこともあって、手当も、旅費も一律ではない。新島のバランス感覚が働いていたと取ることができよう。多くの場合、動詞にはgive が用いられている。ところが安中に行く市原と、岡山に行く金森の旅費は lendである。とすると、安中と岡山の信徒は、あとで学生たちの費用を伝道会社に返却したのであるか。それにしても、福知山へ行く山崎の19円は突出している。

なお新島の報告書では、美濃へは浮田が派遣されることになっているが、『七一雑報』（3巻25号、6月21日号）は美濃へは杉田勇次郎、そして岐阜に浮田が派遣されることになっている。しかし日付は新島の報告書の方が三日遅いから、より正確というべきかもしれない。

⑥Neesima to Jencks, June 18, 1879

Kiyoto

June 18<sup>th</sup> / 79

Mr. Jencks

Dear Sir,

I am intending to come to Kobe this afternoon and I will start for Hiuga tomorrow morning.

Will you accommodate me this evening? and my wife may come next week.

Yours Truly,  
J. H. Neesima

[訳]

午後神戸に行き、明朝日向に発つつもりです。

済みませんが、今晚泊めていただけませんか。妻が来週お邪魔するかもしれせん。

敬具

J. H. ニーシマ

[解説]

新島は小崎弘道を連れて九州旅行に出掛ける。そこで山城丸が神戸を出る前日にジェンクス宅に泊めてもらおうとした。小崎のことが書いてないことからすると、小崎は別のところに泊ったのであろう。新島全集8巻によると、新島と小崎は瀬戸内海を航して佐賀関に至り、美々津、高鍋、宮崎、都城を経て、鹿児島まで行っている。

このハガキの宛名は「神戸花隈村 米国人 ジェンクス様」である。

⑦Neesima to Jencks, July 21, 1880

Yen 530 = gold 360

Kiyoto July 21<sup>st</sup>/80

Mr. Jencks

Dear Sir:

Will you be kind enough to send down your servant to Mr. Sim, a foreign druggist in the concession to get medicine for these two prescriptions, & send them up through Miss Talcott, who should come up here on the latter part of this week? With regard to payment I have 5.30

ens to be charged to the Okayama station.

If 5.30 be not enough to meet the cost please make up the difference.  
I will make it all right to you.

I enclose a draft for \$81.38 for what I bought from San Francisco last year.

I hope you are all well. Please remember me to Mrs. Jencks.

Yours Truly,

Joseph H. Neesima

Please send back these two prescriptions to me at a convenient time.

[訳]

5円30銭=3ドル60セント（金本位）

すみませんが、居留地の外国人薬局のシム氏のところに使いを出して、この処方箋による薬を入手して頂けませんか。薬は今週後半に当地に来ることになっているミス・タルカットにことずけて下さい。支払については、5円30銭を岡山ステーション用の口座から引き落としして下さい。

もし5円30銭を越すようでしたら、差額は立て替えておいて下さい。私が後で払いますから。

81ドル38セントの小切手を同封します。これは昨年サン・フランシスコからの買い物の代金です。

お元氣のことと思います。ジェンクス夫人によろしくお伝え下さい。

敬具

ジョゼフ H. ニーシマ

この処方箋はおついでので節にお返し下さい。

[解説]

神戸の外国人居留地は安政五カ国条約に基づき、1868-1899年の期間、現

在の神戸市中央区の土地に設けられた治外法権の地域であった。東を生田川、西を鯉川、南を海、北を西国街道に囲まれた、約7万8千坪の区域である。ジェンクスの住所「神戸 花隈村」は雑居地に入る。神戸女学院の最初の宣教師、タルカット女史やダッドリー女史は雑居地に住んでいた。薬局のシム氏とはAlexander Sim (1840-1900) というスコットランド出身の薬剤師で、地域のスポーツ振興の功労者。居留地18番に彼の薬局があった。

Eliza Talcott (1836-1911) は神戸ホーム（神戸女学院の前身）を始めた女性宣教師。後年京都看病婦学校・同志社病院の付属宣教師、さらに同志社女学校専門科で旧約聖書を担当したこともあった。

⑧Neesima to Jencks, March 20, 1883

Kiyoto March 28, 1883

Mr. Jencks

Dear Sir

According to Mr. Learned's instruction I enclose two bills for £600 recently sent from Mr. Alpheus Hardy. Hoping you are all well. Please remember us to Mrs. Jencks.

Yours Truly

Joseph H. Neesima

I have also the said bill for £600 for security.

[訳]

ラーネッド氏の指示により、アルフィーアス・ハーディー氏から最近送られてきた600ポンド分の二通の為替を同封します。お元気でありますように。ジェンクス夫人によろしく。敬具

ジョゼフ H. ニーシマ

600ポンドの為替は書留便にしました。



[解説]

私たちはアメリカのドルが最有力通貨の時代に生きているが、新島の活躍した十九世紀後半では、英国のポンドが有力な通貨だった。ハーディーから新島への送金がドルでなく、ポンドであるのはそのためである。1877年11月にJ. M. Sears が新島に家を建てる資金を提供したときも、200ポンドであったことが想起される。

なおラーネッド宣教師は京都ステーションの書記であった。

この手紙には封筒が残っている。宛名は「神戸下山手通六丁目 米国人ジェンクス様」である。

⑨Neesima to Jencks, April 30, 1883

Kiyoto, April 30<sup>th</sup> 83

Mr. Jencks

Dear Sir:

As I am intending to call on you to-morrow afternoon between 2 & 4 O'clocks will you be kind enough to let me have a portion of that money Mr. Hardy sent to me some time ago. I want to use it for my going to Tokio. I want about 90 yen. Will you try to get it ready to be handed to me. If you happen to be absent from your home about that time will you leave it to Mrs. Jencks' hand.

Hoping you are all well

Yours Truly,

Joseph H. Neesima

[訳]

明日の午後、二時から四時の間にうかがいたいと思いますので、過日ハーディー氏が私宛に送って下さったお金の一部をご用意くださいません

か。それを東京に行くために使いたいのです。90円が入用です。ご準備を  
よろしく。その時間ご不在であれば、どうかジェンクス夫人に預けておい  
てください。

お元気であることを願っています。 敬具

ジョゼフ H. ニーシマ

[解説]

第8信で触れているハーディーからの送金の一部を、新島は東京出張に使  
うため、この手紙を書いた。新島はハーディーから与えられた金を私する  
ことなく、日本ミッションの会計に預けておき、必要に応じて出しても  
らっていたことがわかる。

なおこの時の東京出張は、5月の第三回全国基督教徒大親睦会に出席する  
ためであり、京都第二教会代表として金森通倫と上原方立が同行してい  
る。大親睦会は5月8日から12日まで、新栄教会、浅草教会等を会場として  
開催された。11日、新栄教会で行われた礼拝聖餐式で新島は「基督弟子ノ  
足ヲ洗ヒ賜フ事」の説教をし、植村正久を含む聴衆に深い感銘を与えた。

⑩[Memorandum] dated May 1<sup>st</sup>, 1883

Doshisha Co. Constitution

1. The “Doshisha” Company shall consist of five members, who shall own the property of the company, and see that it is used for the maintenance of Christian schools, and shall have charge of all business, arising between said schools and the Japanese government.
2. Said company shall perpetuate itself, electing members to fill vacancies, and shall elect one of its number as president of the schools.
3. All the internal affairs and arrangements of the schools shall be

administered by the regular native and foreign teachers of each school, in company with the president.

4. Money, sent to the schools by foreign friends, shall be expended under the direction of the foreign teachers, or other representatives of the donors, after consultation with the president and the native teachers of each school, respectively.

The Doshisha company at its meeting on the 13<sup>th</sup> Feb, 1883 adopted the above four points as the basis of the company.

Yours Truly

Joseph H. Neesima

Chairman of the Company

Kiyoto, May 1<sup>st</sup> 1883

[訳]

同志社 社則

- 一 同志社ハ五人ヲ以テ組織シ此五人ハ社ノ財産ヲ所有シ基督教主義ヲ以テ学校ヲ維持スルヲ務メ且学校ト政府トノ間ニ生スル百般ノ事務ヲ弁理スベシ
- 二 社員中若シ欠アルトキハ現存ノ者新ニ撰招シテ之ヲ補ヒ社ヲ永続セシムベシ又社員中ヨリ一人ヲ撰ヒ校長トスベシ
- 三 校内百般ノ事務ハ各校ノ内外ノ教員校長ト協議ノ上之ヲ弁理スベシ
- 四 外国ヨリ寄附シタル金ハ外国教員若クハ他ノ委托者ヨリ各校ノ教員ト協議ノ上支払フベシ

同志社カンパニーは1883年2月13日の社員会において、社の基盤として上記四条目を可決いたしました。 敬具

ジョセフ H. ニーシマ  
社長

1883年5月1日

[解説]

この「社則」四カ条は、同志社の最初の憲法であって、アメリカン・ボードの要請によって起草されたものである。現代語に訳さず、『同志社百年史』資料編一のp. 721から引用した。当時は理事のことを「社員」と称した。第一条における5人の社員とは、新島襄、山本覚馬に加えて、2月13日に社員となった伊勢時雄、松山高吉、中村栄助である。

なお、このメモランダムは四カ条がすべて大文字でタイプ印刷され、その後の一文が新島の手書きである。

①Neesima to Jencks, July 26, 1883

Mr. Jencks

Dear Sir:

Will you be kind enough to send these orders to America for me.  
(One order is for my groceries & three orders are for books.)

In your favor of 23<sup>rd</sup> ins. you asked me whether I have any more money from Mr. Hardy. I believe I did send you all I had in my hand some time ago & I have none in my hand now. I hope you are all well. Please give my special regard to Mrs. Jencks. I believe Mr. Learned sent you some money by Miss Barrows yesterday. You are all right now for our Doshisha.

Yours Truly

Joseph H. Neesima

Kiyoto, July 26<sup>th</sup>/83

[訳]

アメリカにこれらの注文を送って下さいますよう、お願い致します。  
(注文の一つは食料品、三つは書物です。)

今月23日のお手紙で、ハーディー氏から送られた金の手許にまだ残っていないかどうかの問い合わせを頂きました。手許にあったお金は一切あなた宛お送りしたと信じています。手許にはありません。お元気のことと思います。どうか特にジェンクス夫人によろしくとお伝えください。昨日ラーネッド氏がミス・バロウズに託していくらかの金をお送りしたと思います。同志社は現在のところ大丈夫です。 敬具

ジョゼフ H. ニーシマ

[解説]

新島が書物だけでなく、食料品もまたジェンクスを通して注文していたことがわかる。

Miss Martha Jane Barrows (1841-1925) はイトコのMiss Dudley に協力して神戸英和女学校(神戸女学院)で働いた女性宣教師。神戸女子神学校(聖和大学)の創立にもかかわった。

⑫[A telegram], Neesima to E. P. Flint, November 5, 1885

Dated November 5, 1885      Brooklyn Iowa 10

To Mr. E. P. Flint   328 Montgomery St SF

Write Mr. Jencks of Kobe by this steamer that I will come by the next steamer. I will come this Saturday.   Joseph H. Neesima

[訳]

サン・フランシスコ   モンゴメリー通り328 E. P. フリント様

神戸のジェンクス氏にこの便船で手紙を送り、私とその次の便船で帰国す

ると伝えて下さい。私はこの土曜日に貴地に着きます。ジョゼフ H. ニーシマ

[解説]

第二次欧米旅行の最後の段階で、新島がアイオワ州ブルックリンから、サン・フランシスコのエージェントである E. P. フリント宛に打った電報であり、従ってこの資料の書き手は新島ではなく電報局 (Western Union) の人である。ただ、この電報がなぜ、どのようにして Japan Mission にもたらされたのか、私にはわからない。

E. P. フリントはアメリカン・ボードのサン・フランシスコ駐在エージェントだったようで、彼と神戸のジェンクスとの間には密接な連絡関係があった (新島の N. G. クラーク宛の 1885 年 3 月 29 日の手紙参照。新島襄全集 6: 269-70)。新島は 1874 年に帰国するとき、アメリカン・ボード会計の Langdon S. Ward からフリント宛の手紙を託されたことを英文日記の中に記している (新島襄全集 7: 93)。1885 年のときには新島はフリントの案内でサン・フランシスコの銃器店その他に案内してもらっている。

このフリントはアンドーヴァーのヒドン家で、アメリカの生活を始めたばかりの新島に自発的に家庭教師を務めた Ephraim Flint と混同してはならない。そのフリント牧師は 1882 年に永眠しているからである。

⑬Neesima to Jencks, December 30, 1885

Kioto, Dec. 30<sup>th</sup>/85

Mr. Jencks

Dear Sir,

I am very much indebted to you for your sending me a box sent from Mr. Flint.

I expect to make  account from  to Kioto

as soon as I can and will send it to you.

Yours Truly

J. H. Neesima

[訳]

プリント氏から送ってきた箱を送って頂き、御礼申し上げます。

できるだけ早く、サン・フランシスコから京都までの費用の明細を作り、あなたにお送りしたいと思います。 敬具

J. H. ニーシマ

[解説]

アメリカから帰国した新島は、サン・フランシスコのプリントを通して別送した荷物の箱を、神戸のジェンクスから受取った。手紙は汚れていてよく読めないが、恐らくはサン・フランシスコから神戸を経て、京都までかかった諸費用のリストをジェンクスに送ろうとしている。

これは葉書であり、表書きは「神戸仲山手町 ジェンクス様」となっている。

⑭Neesima to Jencks, April 28, 1886

April 28<sup>th</sup>/86

Mr. Jencks

Dear Sir:

In Dr. Clark's last letter to me he mentions that I might see his letter to you by this mail.

I am anxious to know its content specially referring on the matter of Sendai, where we are planning to start a new work as you know.

So, I shall be much obliged to you if you let me know what the Doctor says with regard to that new field.

Please tell me also that when you did receive a cablegram fr. him for my going to Sendai. Hoping you are all well.

Yours Truly

Joseph H. Neesima

P. S. Mr. Deforest & myself are planning to go to Sendai within a week. However we shall chiefly depend on Dr. Clark's words.

[訳]

私宛のクラーク博士の最後の手紙の中で博士は、あなた宛の博士の手紙を読んでもよいと書いておられます。

特に仙台について、内容がどうなのかを知りたくてたまりません。ご存知のように、私たちは仙台で新しい事業を始めようとしているからです。

そういうわけで、博士がその新しい事業について述べておられることをお知らせいただけると幸いです。

私が仙台に行くことに関して博士から電報が来たなら、どうかお知らせください。皆さまがお元気であるようにと願っています。 敬具

ジョゼフ H. ニーシマ

追伸 デフォレスト氏と私は一週間以内に仙台に行く計画です。しかしながら、そのことは主としてクラーク博士のお言葉次第なのです。

[解説]

1884年から85年にかけて7週間に亘り、新島はニューヨーク州クリフトン・スプリングスで静養中に、クラーク博士に東北伝道の計画を打明け、博士の了解と激励を得ていた。彼はアンドーヴァー神学校の神学生の間に東北伝道の話をもちかけ、数名の熱心な神学生を確保したつもりであった。帰国後、彼の計画は富田鉄之助が仙台の松平正直知事と連絡を取り、先ず仙台にキリスト教主義に基く学校（はじめ宮城英学校、のち東華学校



と呼ばれることになる) を作ることから着手することになっていた。新島には三つの心配があった。一つは地元がどれだけの熱意をもってその学校を受け入れてくれるか、の問題であり、第二は同じくキリスト教の学校を計画していた押川方義(一致教会)との競合の問題だった。第三は、クラーク博士の了承を得たとはいうものの、アメリカン・ボードの最高審議会がその学校計画を承認するかどうかの問題があった。ジェンクス宛のこの手紙は、この第三の問題に関するものであったと考えられる。

クラーク博士からは、四月中に仙台に行くべしとの電報が届いた(全集5:278)ので、新島はいよいよ仙台の学校計画に着手したのであった。

この手紙には封筒も残っている。宛名は「神戸山八十番 ジェンクス様」。